1. 富来地区と地頭町の概要

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4911

1．富来地区と地頭町の概要

鹿　野　勝　彦

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．富来地区
Ⅲ．地頭町
Ⅳ．おわりに

Ⅰ．は　じ　め　に

金沢大学文学部文化人類学研究室では、1998年度の調査実習を、石川県羽咋郡富来町富来地区の地頭町において実施した。本報告書はこの調査実習参加者が分担執筆した報告によって構成されており、当研究室の調査実習報告書としては14冊目のものになる[1)]。

ここで調査対象集落決定までの経緯と、調査実習の進行過程について、若干ふれておく。まず調査対象集落については、1997年度に続いて富来町から選定する方針でのぞんだ。これは1998年度は参加学生が18名と例年に比べても多かったうえ、スタッフが転出によって一時的に手薄になったため、担当スタッフ（鹿野、鏡味）にとって、いわゆる土地勘のある地域を対象としたかったという事情が関係している。また同じ事情から対象集落を複数とすることが困難であったため、１つにしぼるかわりに、従来よりやや大規模な集落を選定することとした。以上の方針をもとに、まず５月にスタッフによる予備調査を行い、町役場等の助言を得て、富来地区地頭町を最終的な候補地とした。幸いに地頭町から調査受け入れについて好意的な返事を頂き、実施についての見通しがたったのは６月に入ってからである。

一方、研究室では、調査参加者を対象とした調査についての心がまえや、面接による聞き取り、観察を通してのデータ収集、整理などの技法についての講義、訓練は４月から開始していたが、調査対象集落が決定したのちは、集落とその周辺についての文献、統計、その他の資料の収集と分析、報告を、参加者が分担して開始し、夏期休暇中に実施する本調査に備えた。このプロセスは例年の調査実習と基本的には共通しているが、富来町を２年続けて対象としたため、町に関する基礎的な資料は前年度にある程度収集ずみで、それをそのまま利用できたという点では、負担が軽かったという面はある。

本調査は正味１週間の日程で、地頭町から徒歩15分の七海の民宿に滞在し、期間中は地頭町住民の方々ならびに町役場その他富来町内の各施設での、面接による聞き取りを主として行った。この段階までは参加者個別のテーマは設定せず、むしろなるべく網羅的にデータを収集し、かつ収集したデータを調査参加者全体で共有することを基本的な方針とした。そして本調査終

了後、あらためて参加者が報告書への執筆を前提に各自の関心に基づいてテーマを設定し、以降はそのテーマを念頭において個別に1999年2月まで補充調査を行いつつ、報告を執筆していった。テーマの設定にあたっては、聞き取り、観察に基づく資料を中心に、おおむね第2次大戦後の約50年に限定するという以外、特に制限や、調整は行っていない。ただしこの間、参加者全員によるミーティングを何回か実施し、各自が中間報告をすることによって、相互に情報、意見の交換を行った。このように、報告書全体としては、各自の関心に基づくテーマ設定を優先したため、必ずしも全体としての体系性、網羅性やテーマ間のバランスは保たれていない。

こういった報告書作成の方針は、やはり従来のそれをほぼ踏襲しているが、本章の以下の部分では、このことを前提として、地頭町がその一部である富来地区と地頭町そのものについての必要最少限の一般的記述をし、2章以下の各論の導入と補足を行うことを目的としている。

Ⅱ．富来地区

現在の行政単位としての富来町については、1997年度の調査の報告書にある程度記したので、ここでは繰り返さない（金沢大学文化人類学研究室：1998. 2－3）。

調査の直接の対象である地頭町の位置する富来地区は、1954（昭和29）年に1町7村が合併して現在の富来町を形成する以前の、旧富来町であり、その経緯からもわかるように、現在の町を構成する8つの地区の中では、最大の人口規模をもつとともに、政治的にも経済的にも中心的な位置を占めてきた地区である。

地理的にも地区は町の中央部にあるが、日本海に面する西部の北半は長大な増穂浦の砂浜、南半は能登金剛として知られる海蝕崖と、地形は変化に富んでいる。そのほぼ境目に北東から流入する富来川の両岸には小規模な沖積平野が形成され、東部は標高200～300メートル前後のゆるやかな丘陵となっている。

地区を構成する6つの集落はおおむね海岸よりに位置するが、そのうち規模の大きい地頭町、領家町、高田の3集落は、富来川両岸とその北部に集中して立地しており、この部分が地区、ならびに町の中心をなしている。すなわちここに町役場をはじめとする主要な公共施設やバスの発着所、商店などが集中しており、また富来町と外部を結ぶ国道、主要地方道がここを縦断している他、町内の各地区を結ぶ道路もここから放射状に伸びる形をとっている。一方、南部には、福浦港（ふくらみなと）地区に至る海岸沿いに、七海（しつみ）、生神（うるかみ）、牛下（うしおろし）の、比較的小規模な集落が点在している。

これら6集落のうち、南部の3集落は、もともと農業、漁業などと観光とを主な生業としてきたのに対し、北部の3集落では、農業もある程度行われてきたものの、むしろ地域の中心のマチとしての性格を反映して、商業をはじめとする自営業や賃金労働が、古くより大きな比重

を占めていた。以下では、富来地区の中でも、特に言及しない限り北部の3集落にしぼって記述を行うことにする。この3集落の近年における世帯数と人口の変化をまとめると表－1のようになる[2)]。

表－1　富来地区北部集落の世帯数、人口

	地頭町		領家町		高田	
	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口
1965（昭. 40）	315	1,174	243	953	74	269
1970（　45）	298	1,096	294	1,062	66	252
1975（　50）	288	1,036	304	1,145	92	322
1980（　55）	286	1,024	320	1,212	95	350
1985（　60）	286	1,012	323	1,204	97	348
1990（平. 2）	305	1,001	327	1,132	93	316
1995（　7）	323	983	354	1,165	65	209
1998（　10）	287	935	350	1,155	95	320

資料出所：1965－1995、国勢調査
　　1998　4月1日現在、町役場

これら3集落は、富来川をはさんで右岸が領家町、左岸の河口よりが地頭町、上流よりが高田という位置関係にあるが、川の両岸には全体として700戸を超える家々の大半が軒を接して連なるまとまった街区が構成されており、ここには現在も多くの商店、飲食店、旅館、金融機関などと、病院、警察署、郵便局、JA、バス発着所など、町の主要な公共施設の大部分が集中していて、あきらかに地域の中心としてのマチ的な景観を見せている。この街区からはややはなれているが、地区内には県立の富来高等学校、地区の子供たちが通う富来保育所（いずれも領家町）、富来小学校（高田）などもある。もっとも近年では国道249号線が海岸沿いに拡幅整備のうえ移設されたのにともない、町役場や大型ショッピングセンター、観光関連施設などが領家町の域内とはいえ、海岸部の国道沿いに移転し、ないし新設されたことによって、富来川沿いの地域がさびれ、中心性を失いつつあるとの指摘もある。

集落の周辺には水田や畑地が、さらにその背後の丘陵部には山林がひろがっており、また西には日本海があって、農業や林業、漁業などは、高田の大半の世帯や、地頭町、領家町の周辺部に住む一部の世帯にとって、かつては主要な生業であったが、地区全体としてはそれら第1次産業は副次的なものとみなされてきたし、いうまでもなく近年ではその傾向はさらに強まっている（表－2参照）。ただ実際に農業や林業に従事しないイエにおいても、ある程度以上の田畑や山林を所有することは、やはり少くとも近年までは、実利的な意味ばかりでなく、ステータス・シンボルとしての意味をもっていたようである。

表－2　地頭町の農業

年度	戸数	農家数	農家率(%)	専業農家	1種兼業	2種兼業	請負わせ農家	請負農家
1970	298	54	18.1	3	0	51	46	0
1975	288	44	15.3	3	1	40	38	1
1980	286	44	15.4	0	2	42	35	1
1985	286	33	11.5	3	0	30	28	3
1990	305	33	10.8	5	1	27	20	0
1995	323	23	7.1	3	0	20	15	0

資料出所：『1995年農業集落カード』
ただし戸数は国勢調査、農家率は農家数／戸数
請負、請負わせは水稲耕作についての数値

地区としての主要な生業は、古くより各種の製造業と商業・サービス業であった。このうち製造業に関しては、第2次大戦前までは蚕糸、藁製品、酒造といった第1次産品の加工を行う小規模な地元資本の工場が中心で、周辺の農村、漁村を主な市場としていたが、第2次大戦後、特に1960年代後半から1970年代にかけては、町の積極的な工場誘致政策もあって、繊維、電子関連の工場が町外から進出し、富来地区ばかりでなく、周辺の農・山・漁村に対しても、多くの雇用が創出された。当時の工場の雇用者数は、この2つに限っても500名近かった（『角川地名大辞典・石川県』435)。ただこういった工場も、最近では省力化や不況の影響で、かつてに比べれば雇用者を減らしている。

商業・サービス業は、地頭町、領家町の中心部にイエをかまえる世帯の多くにとって、もっとも主要な生業であり、さまざまな日用品の小売りを行う商店の他、呉服や家具などの耐久消費財を扱う商店や飲食店、旅館、理髪、浴場などのサービス業、あるいは運送業などの業種に従事する者が多かった。このことは、この地区の商業・サービス業が、地区内やその直接の周辺の農・山・漁村などに住む人々ばかりでなく、かなりの遠方から訪れる観光客などをも対象として営なまれていたことを示している。

またこの地区には、既述のようにさまざまの公共機関、施設などが集中しており、そこへ通勤する賃金労働者も、以前からかなり多く住んでいた。これらの人々の大部分は、一方では先にふれた工場などの従業員と同じく、農業や商業などを経営する世帯の一員であり、いったんは高等教育を受けるために転出したのち、地区へもどったという経歴をもつ人々も多い。また一定の年齢に達して勤め先を退職したのちは、ある期間、もっぱら農業や商業などに従事するという例も、少くない。

またこの地区に限らず、富来町ならびにその北に位置する門前町の一部を含めて特記すべきこととして、船員として働く者が多かったことがあげられる。彼らは地域の住民でありながら、

年の大半は地域の外で就労する。しかしその収入は、地域で生活する家族の生活はもちろんのこと、町の財政や地域の商店等の経営を支える重要な要素であった。近年では雇用事情の変化によって、地区に住む現職の船員の数は著しく減少したが、それでも退職者を含む船員経験者が、地区において占める比重は、かなり大きなものがある[3)]。

このように船員に限らず、地区で生まれ育ち、中学ないし高校卒業後に進学、就職のためいったん金沢や関東、関西などの大都市部へ転出したのち、さまざまな事情のもとで地区へもどる選択をした人々を含む世帯は、おそらく地区を構成する世帯の大半を占めているであろうことは、想像に難くない[4)]。また季節的な出稼ぎも、ある時期までは地区やその周辺住民にとって、重要な就業の形態であった。

このように地区の生業のありかたと、そこに居住する世帯やその成員の生活との関係は複雑であるが、いずれにせよこの地区の特徴が、富来町全域をはじめ、その周辺の中島町、門前町などの一部を含む地域の中心地であるとともに、地域と外部をつなぐ結節点としての性格をもっていたことにあるのは、たしかであろう[5)]。だがそういった特徴が、近年しだいに稀薄になってきたことも否定できない事実である。その原因としては、大別して以下の2つが考えられる。すなわち第1に地区ならびにその周辺地域において、全体として過疎化、人口の高齢化が進み、地域全体の活力が減退したことである[6)]。もっとも表－1で見るように、富来地区の中でも地頭町、領家町に限れば、統計の上からは世帯数は近年でもむしろ増加しており、人口も最大時に比べても微減にとどまっていて、過疎を問題にするのはあたらないように見える。しかし実際には、例えば、富来町内の中学校生徒数の近年の変化などからもあきらかなように、とりわけ再生産年齢層、若年層の減少は著しく、住民の間でも、この点についての危機意識はかなり強い。

表－3　富来町の中学校卒業生徒数

年　　度	生徒数
1963（昭. 38）	454
1968（　43）	362
1973（　48）	261
1984（　59）	238
1988（　63）	215
1993（平. 5）	181
1997（　9）	123

資料出所：1963－1973　中学校統合以前の町立中学校卒業生数合計（『富来町史・続資料編』521による）
1984－1993　富来中学校卒業生数（『十周年記念誌』による）
1997　3年生在校生数（富来中学校「平成9年度学校管理計画」による）

第2には道路網の整備とモータリゼーションによって住民の行動圏が拡大したことである。近年では、この地区の住民であれ、周辺の住民であれ、通勤の範囲は富来町の範囲を越えて七尾市や羽咋市あたりまで拡大したし、休日を利用した買物やレジャー活動には、金沢までゆくこともごく普通になってきた。反面、観光客などの来訪者の数は減少し、ないしは滞溜する時間が短縮した。

またより微視的には、既述のように、地区とその周辺での道路の移設や施設の移転が、地区内での中心を分散させる結果を招いたともいえよう。いずれにせよ現在では、もともと地区の中で、もっとも中心的な街区とみなされてきた、富来川河口からやや溯上したあたりの両岸に位置する商店街の一帯では、平日の日中には閑散としてあまり通行人の姿を見かけないような状態に陥っている。

以下では本調査の直接の対象となった地頭町について、より具体的にその状況を見てゆきたい。

Ⅲ. 地　頭　町

地頭町は既述のように富来川下流部の左岸一帯に位置し、表－1に見るように、現在では世帯数、人口において領家町を下まわるが、かつては富来町内でも最大の規模をもつ集落であった。地頭町は現在2つの区、24の班で構成されており、1区（通称寺地（てらぢ））は1～10班、2区（通称登手（のぼりで））は11～24班からなり、境界は地頭町と領家町を結ぶ富来大橋から東へのびる道路であるが、21～24班は、東側の山裾に比較的近年造成された宅地に立地しており、「住宅」、「団地」などと呼ばれている。

地頭町の中心部は富来川の東側をほぼ南北にのびる主要地方道富来・中島線と、これに富来大橋から東へのびて交叉する上述の道の両側の商店街で、バス発着所（富来駅）、いくつかの金融機関の支店、JA支所、羽咋警察署富来交番などもここにある。またその西側、富来川沿いには羽咋消防署富来分署、富来郵便局などの他、かつては町役場も位置しており、これが領家町の現在地へ移転した跡地には、領家町にあった町立病院が移設され、1998年8月に開業した。一方、主要地方道の東側に平行する道の南部は小料理店、スナックなどが軒を連ねており、その北側には地頭町の産土社である建部神社と、2つの浄土真宗大谷派に属する寺院（本隆寺、本光寺）がある。主要地方道を北へたどると、道の西側は高田となるが、東側は地頭町で、集落のはずれに近いあたりにトギ電子工業など、いくつかの工場が立地している。

地頭町はすでに何度かふれたように、もともとかなり広域を対象とする商業・サービス業を主要な生業としてきた集落であるとともに、富来町の行政の中心でもあり、住民の多くは公務員、会社員などとして賃金労働にも従事してきた。これを世帯の側から見れば、典型的には世

帯主が自営的な商業等を経営しつつ、後継者には可能な限りの教育を受けさせ、その後一定の期間は賃金労働に従事させながら、しだいに経営をまかせてゆくといった戦略が成り立つ。そしてしばしば下の世代の成員は、この過程のある時期に町を離れて生活することも想定されていた。

その一方で、自営業等を継がない場合であっても、賃金労働者として集落内に分出し、居住しながら生活を支えてゆく条件は、農村的な集落に比べれば整っていたし、特にここでは船員という地域内の雇用に依存しない職種を選択することによって、その可能性はより拡大されていた。また行政側も宅地や住宅の造成、建設などによって、こういった賃金労働者、船員などの定着、ないし周辺地域からの流入を促進し、世帯数と人口を増やしてきたのである。

こういった中心地としての性格から、地頭町は周辺の他集落から見てやや別格のマチであり、地頭町住民には、農・山・漁村的集落はもとより、領家町についても、「シンタク（分家）の多いオッサマ（次、三男）のマチ」という捉え方があった。その一方で、地頭町で代々商店などを経営する若干のイエはオヤッサマ、ダンナサマなどと呼ばれ、通称としての屋号でも・・ヤ、・・サなどと称されて、常に一目おかれる存在であった。これらのイエはその経済力を背景として、地頭町の内部のみでなく、富来地区やその周辺地域においても、有力者として影響力を保持してきたのである。すなわち地頭町と周辺集落との間においては集落間の、またその住民内部においてはイエ間での、ある種の階層性が存在したのであり、そのことは今日に至るまで町の運営や役員の選出、町会費（万雑）の負担のありかたなどに、多少とも反映されているように見える。

例えば地域の最大の行事である富木八幡（とぎやはた）神社の夏季祭礼は、富来地区、東増穂地区の多くの集落の協力によって運営されるが、この際にも地頭町はその中心的なにない手であると自負しており、かつ町内ではオヤッサマと呼ばれるようなイエが、より大きな負担を負うのが当然であり、当事者にとっては誇りでもあったとされる。あるいはかつて建部神社で盛大に行われ、地区内外から多くの観客が集まったという秋季の奉納相撲大会などにも、これらのイエがパトロンとして、積極的な役割を果たしてきた。こういった地頭町の性格は、一方では周辺の住民からは、気位の高さとみなされる面があり、そのことは地頭町住民の側も「昔は商売といっても、在郷の者が買物に来ると、売ってやるという態度だった」と、自戒をこめて語るように、ある程度自覚されていたようである。

だが地頭町の中心性を背景とした住民の意識は、前節で述べたような地区内外の変化とともに変ってきた。そして現在、住民のあいだには、一方では危機感をともなっての積極的な対応が、また他方では町や地区の将来に対する悲観的な見通しに基づくあきらめの態度が、併存しているように見受けられる。例えば前者には、道路の移設にともなう集合店舗の建設のような経済面での試みから、国際科を設置し、中高一貫教育システムの構築を目指している県立富来

高校への町からのさまざまな支援といった教育面での対応、あるいは八朔祭礼の日程変更やさまざまのイベントの開催まで、多岐にわたる。

だかこういった活動は、いずれにせよ、もはや地頭町や富来地区を周囲から差異化し、その中心性を取りもどしてゆくというより、むしろ地区内の3集落間の均質化がすすみ、言い換えれば抱える問題が共通化したことを前提として、富来町のレベルでその解決を目指すという方向に収斂していっているようにみえる。

けれどもこのように町の活性化に積極的に取り組もうとする住民も、その一方で、多くが個別、世帯のレベルでは、自らが経営する事業を地頭町内から移転させたり、下の世代に対してはイエを継いで町に残ることを期待せず、むしろ転出してゆくことを容認し、ないしその前提となる教育への投資を積極的に行うといったことに見られるように、地頭町や富来町の将来に対する否定的な見通しを前提とした対応をせざるをえないといった矛盾を抱えているのである。

Ⅳ. お わ り に

言うまでもなく、上に述べたような矛盾を抱えているのは、地頭町とその住民ばかりでなく、能登に限っても、金沢の直接の通勤圏からはずれた地域の大部分の集落とその住民において、共通のことであろう。とはいえ個々の集落を規定する個別の条件や、それぞれが辿ってきた独自の歴史が、その集落の個性を形造っているのも事実である。私達の調査実習が基本的に集落を単位として取りあげてきたのも、そのような個性を、できる限り具体的な事象を通して学んでゆきたいという意図からであった。

本報告書でも、そのような意図に基づいて以下の各章が執筆されているが、例年のことながら、限られた期間と、はじめて実地調査を経験する学部3年生を主とするメンバー構成、指導者の実力不足などから、その内容は充分に当初の目的を達成しえたとはいいがたい。個別の記述の誤まりや不充分さも多々あると思われる。各位の厳しいご批判、ご叱正をお願いする次第である。

注

1）既刊の報告書については、巻末の「参考文献・参考資料」の項を参照されたい。

2）ただし少くとも地頭町に関する限り、国勢調査や町役場の数値と、調査によって把握した実際の居住状況には若干の差があり、実際の居住者の方がやや少なめであることを記しておく。

3）船員を対象とした町営住宅は、地頭町以外にも1960年代から1970年代にかけて、少くとも高田で17戸、領家町で28戸が建設されている（7章表－2参照）。

4）富来町における高校進学率は1963年に50％を、1970年に60％を超え、1976年には90％を突破するなど、1960年代から1970年代にかけて、急速に上昇した（金沢大学文化人類学研究室：1998. 11）。

5）ある住民は「かつては（東京の）上野の駅で富来といえば、通しで切符が買えたものだ」と語る。この場合、少くとも羽咋から富来まではバスによることになる。ちなみに富来のバス停留所は、現在も「富来駅」と表示されている。

6）能登における過疎化の過程と現状については、ここで詳述することはさけるが、筆者らで組織した過疎村落研究会による報告書（過疎村落研究会：1996）を参照されたい。